

有機農業と自然の問いと教え

(原文)

小野 雄希 (20 歳)

埼玉県

埼玉大学

私は現在大学で有機農業を実践している。一般的に有機農業は農薬・化学肥料を使用しない農法と解されるが、それだけではなく生命尊重の思想・生き方でもある。農薬等の不使用はむしろ、そうした思想の実践・枝葉であるとも言える。

私は土に触れ、農作物に接する中で、自然から非常に多くの教えを得た。それだけではなく、自然と人との葛藤や矛盾にも直面した。まず、私たち農民は、雑草や害虫を、農薬は使わないものの駆除せねばならない。しかし彼らもまた自然の一部であり、大切な命がある。自然から恵みを得るために、命を奪う。換言すれば、「この農作物を育てる」立場をとれば、「ほかの生きものを押し退ける」必要があるので。私たち農民は、しぶとくとどまることを知らない雑草や害虫に悩まされ続けている。「雑」や「害」といった名称・価値付けも、当然こうした悩みから来ている。しかし例えば神様は、そうした価値観を、雑草や害虫に対して持っているだろうか。いや持ってなどいないだろう。むしろ農作物も雑草も害虫も、命として分け隔てなく見ているであろう。だがこうした見方は、有機農業を行っているともすれば忘れがちになるのだ。雑草に土からの養分を奪われてか弱くなったネギや害虫に無残にも食い荒らされたジャガイモを見る度に、やるせなさや怒りまでもが込み上げてくる。農作物を得るためには、「邪魔者」を殺さなければならない。皆同じ命なのに。有機農業を行うことで、自然は私に痛切な問題を投げかける。

更に、こうした作るだけでなく食べることにも、葛藤や矛盾がある。これは農民に限らない話だが、人間は収穫した野菜や果物、お米等、無数の命をいただくことで生かされている。有機農業を行うことで私は、「お料理」というよりも「命」をいただいているのだと教えられた。そして私は「生きている」のではなく、「生かされている」のだと気付かされた。つまり言い方を変えれば、命を奪わずには生きられないのだ。この言わば解決不可能な問題を、自然は私たちに投げかけている。この問題に昔の日本人が向き合ったことで、食事の始まりと終わりに手を合わせ、命に哀悼と感謝を表す文化が生まれた。お米の一粒ひとつぶに神様が宿るとされた。私達人間は日々命をいただき、その命なしには生きられないことを、強く実感させられた経験がある。有機農家の家に泊まり込んで研修を受けた経験だ。朝早起きをして鶏のエサやりと卵回収をするのだが、そこで初めて「卵は温かい」ことを知った。勿論頭の中では分かっていた筈だった。だが振り返れば、私がいつも触れていた卵は、冷蔵庫で冷やさ

れた卵だった。私は卵の温かさに「命」というものを実感し、また普段あまりにも命を軽視していたことを恥ずかしく思った。更にこの命をいただく以上、謙虚に一生懸命毎日をいかなければと自分に言い聞かせた。

有機農業を行うことで、前述したような葛藤が存在することを自然は私たちに気付かせてくれる、実に様々なことを教えてくれる。私は自然が好きだ。土をいじっていると、日頃の悩みが小さなことだと分かる。農作物を見つめるまなざしが、いつのまにか優しくなっていることに気付く。畑にいただけで、日常生活の時間の流れが相対化される。農作業に流す汗が、こんなにも美しいことを知った。水の肌触りや土のにおい、植物の緑や風の音からとても多くのことを感じ取れるようになった。私たち人間は、おおらかな自然に囲まれて生かされている。そうした自分の立ち位置に、有機農業等を通じて気付くことで、生きることのかげがえのなさ、よりよい生き方を考えることができるのだ。